がん社会を診る

中川　恵一

ピロリ菌除菌 効果は様々

胃がんの原因となるピロリ菌の感染は免疫力が完成する5歳くらいまでに食べ物などを通して起こります。一度感染すると、そのまま胃に住み続けることがほとんどです。

胃液は、金属も溶かす強酸性ですから、ふつうの細菌は生きていけません。しかし、ピロリ菌はアルカリ性のアンモニアを作って胃酸を中和しながら生きています。これに伴う炎症などが胃潰瘍、十二指腸潰瘍のほか、胃がんの発症につながります。

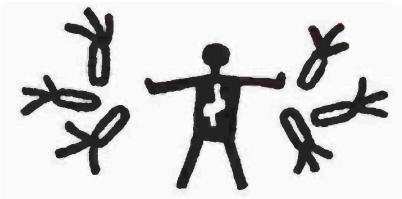
冷蔵庫や水道が普及する前の感染率は、100%近かったと考えられています。人類はピロリ菌と切っても切れない関係だったのです。

1970年代でも日本人の4人に3人が感染していました。しかし、90年代での感染率は約5割、最近では35%程度まで減少しています。

幼児期の食物衛生が悪かった世代の感染率が高いのに対して、若い世代の感染率は減少の一途をたどっています。

胃がんの原因の98%がピロリ菌感染とされますから、胃がんは急速に減っています。

胃がんの他、ピロリ菌は胃粘膜に存在するリンパ球の一部が腫瘍化する「悪性リンパ腫」の原因にもなります。ふつうの胃がんが薬物だけで治ることはありませんが、このタイプの悪性リンパ腫では、ピロリ菌の除菌によって消えてしまうことも少なくありません。このため、多くの胃の悪性リンパ腫では、放射線治療や抗がん剤ではなく、除菌を最初に実施します。



イラスト・中村　久美

ピロリ菌は胃とは全く関係のない病気の原因にもなります。血液の成分のうち、出血を止める働きを持つ血小板が減少してしまう「特発性血小板減少性紫斑病」です。国の難病に指定されています。この病気になると出血しやすくなり、皮膚に内出血による紫色の斑点が出るので「紫斑病」とも呼ばれています。

「特発性」という病名は、原因が特定できない場合につけられますが、最近、ピロリ菌感染が原因の一つになることがわかってきました。ピロリ菌に対する抗体が血小板に対しても攻撃することがあり、血小板の数が減ると考えられています。除菌によって半数近くのケースで血小板数が回復するとされています。

ピロリ菌の除菌は胃がん予防以外にも、さまざまな恩恵をもたらしてくれるのです。

（東京大学病院准教授）

掲載日 2019年05月15日 日本経済新聞夕刊 004ページ

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。